（研究・調査）

一橋大学所蔵『大塚文庫』の調査

細　谷　新　治

1

私は、日本の敗戦直後の1945年９月、母校の経済研究所（当時は東京産業大学東亜経済研究所といっていた）の資料課に就職した。その年の12月、大塚金之助先生が大学に復職、1947年に経済研究所長に就任した。先生は上原専録学長とともに研究所の大改革を実施したが、私は資料課職員であったため居残ることができた。翌年の１月だと思うが、先生は私に「君はブックマンになりたまえ」と言われた。このヒトコトが私の一生を決めてしまった。私は自分をライブラリアンだと思っていたから、今さらブックマンになるとはどういうことかと思っていたが、先生によればブックマンとは、恩師の坂西由蔵博士やカール・メンガーのような書物愛好家・書物収集家のことであった。先生はまた自分自身を書物の技術者といっていることも知った。

それから私は最高のブックマンからヨーロッパの図書館学や書誌学の訓練をうけ、その間、先生の研究所再建計画を実現するための図書収集の仕事に力をつくした。この前後の事情については、『経済資料協議会五十年史』の第１章「五十年のあゆみ―第１世代ブックマンの回想―」に書いたから繰り返さない。1956年、先生が停年退官されると、今度は私が少しずつ先生の書物収集の手伝いをするようになった。1974年、先生は東ドイツの国立図書館へ送った和書の「大塚文庫」を完全なコレクションにするために自分の洋書を一橋大学に売却する決心をした。この先生の申し出を都留重人学長に橋渡しをしたのは私である。この洋書の売却代金を手にした先生は、一生のうち最後

の2年間に、はじめて心ゆくまで書物収集の楽しみを味わったが、その書物はすべてドイツと一橋大学にある二つの大塚文庫を充実させるためであった。二つの大塚文庫については、私は以前に紹介したことがある。

細谷新治：二つの大塚文庫『窓』第25号（1978. 6）

細谷新治：『大塚金之助著作集第5巻　わたしの読書遍歴』（1981. 3）の解題

またこれまで二つの大塚文庫を紹介したエッセイもいくつかある。とりあえず私の目にふれたものをあげておこう。

杉原四郎：抵抗としての集書と珠玉の文庫「大塚金之助著作集の予約募集パンフレット」（1980. 4）所収

金沢幾子：大塚文庫について『大塚会会報』No. 18（1991. 5）

西沢　保：大塚文庫について『鐘　一橋大学附属図書館報』No. 29（1995. 10）

松井　博：ベルリン国立図書館の大塚金之助文庫を訪ねて『大塚会会報』No. 23（1996. 5）

また、いうまでもなく先生は書物収集の苦心談や、二つの大塚文庫について多くの文章を書いているが、ここでは『大塚金之助著作集』の各巻に収録されたものをあげておこう。

『第1巻　わが道』より。「大学教師生活の思い出」、「わが道　経済学」

『第4巻　解放思想史の人々』より。『解放思想史の人々』1949.（岩波新書　青版1）の各編の注。

『第5巻　わたしの読書遍歴』より。「讀書随筆」、「書物あつめ」の見出しのなかのエッセイ、その他。

『第7巻　社会思想の旅　1』。この巻には『ある社会科学者の遍歴—民主ドイツの旅』（1969. 7）が収録されている。この書物の各章・節の末尾につけた「材料」と名づけられた注には先生のブックマンの真骨頂がいかんなく発揮されている。

ところで、今度私は一橋大学の「大塚文庫」の調査をすることになった。その理由はつぎのとおりである。『大塚会会報』第28号の会員近況の欄で附属図書館の金沢幾子さんが報告し、同号の2001年大塚会

報告の欄で津田内匠先生が指摘しているように、これまで社会科学古典資料センターで預っていた「大塚文庫」の整理が終わり、また附属図書館の拡張工事も完了した機会に、「大塚文庫」を貴重書として附属図書館の書庫に移すか、古典資料センターに貴重書文庫として保管するかという問題が出てきたからである。図書館では、この問題の結論を2001年度末（来年の３月）までに出す予定である。そのための調査　資料を附属図書館の金沢幾子さんと社会科学古典資料センターの石井健助手が担当し、今年の12月までに報告を出すことになった。そして私も「大塚文庫」に係わりの深い人間としてこの作業に参加することになったわけである。

そのため私は９月頃から少しずつ調査を始めたが、この小文はその作業の中間報告である。今回は、資料として「わが道　経済学」を使い、先生がマルクス経済学へ転換する以前に収集した数理経済学の文献と、マルクス経済学へ決定的に転換するきっかけとなったマルクスの『資本論』（先生は『資本』と呼んでいた）と『剰余価値学説史』の２書にしぼって報告しよう。

2

大塚先生は1919年（大正８）４月、海外留学に出発した。目的は指導教官福田徳三教授から命ぜられた数理経済学の研究であった。福田は晩年に、生涯をかけてとり組んだ厚生経済学の体系の完成のためには数理経済学の研究成果をとり入れることが不可欠であると考えるようになった。しかし、自身が数理経済学の研究を始めることはすでに余力がないと悟って、この研究を大塚に命じたのである。

大塚はまずニューヨークのコロンビア大学に入学して、ムーア教授（H. Moore ）の下で統計的経済理論を学んだ。翌1920年１月、大西洋をわたってイギリスに入り、London School of Economics and Political Science に入学、S. ウェッブ教授の社会思想史その他の講義をきき、W.S. ジェボンズの “The Theory of Political Economy.” などの数理経済学の古典を集めて読み始めた。５月、フランス、スイスを経てドイツに移り、ベルリン大学に入学した。大学では、はじめボルトキェー

ヴィッチ（L. von Bortkiewicz）教授のゼミナールに参加してオーストリア学派の理論経済学の勉強をつづけた。この頃から同派やローザンヌ学派のL. ワルワス，V. パレート教授の文献の収集を本格的に集めだした。

3

「大塚文庫」のワルラス文献は、父A. ワルラスの5件を含めて38点ある。このなかの“Eléments d'économie politique pure, ou théorie de la richesee sociale.” 1874～77. 2 vols をはじめとするいくつかの主著は購入している。例えば“Eléments”の第4版はタイトル・ページの見返しに

KINNOSUKE OTSUKA jan 24 1921

とある。この書物は全ページに赤線を入れて読んでいるが、マージナル・ノートはない。

彼は主著の収集に満足せず、ドイツ留学3年目の1922年（大正11）の夏の1ケ月をローザンヌ学派の発生地、スイスのローザンヌに滞在して毎日、町の古本屋の地下室にもぐり込み、地方誌を1冊1冊調べてワルラスの論説を探し出した。

それでも不満足で、大塚は思いきって娘さんのミス・ワルラスに手紙を出した。この娘さんは、御崎加代子（滋賀大学経済学部助教授）の『ワルラスの経済思想』（1998）によると、父の死後、残された資料の管理に力を尽くしたアリーヌ・ワルラス（Aline Walras, 1863-1942）である。彼女は大塚の要求に応じて惜しげもなく、「ローザンヌ新聞」や、『労働』（Le Travail）という月刊雑誌の2年分など貴重な文献を送ってくれた。「これは、協同組合運動評論誌で、労働階級のための国際機関誌であり、ワルラスはその編集者の一人である。ワルラスは、署名・無署名の文章を執筆しているが、無署名のものにはだれかが一々LWと鉛筆で書きいれてある。無署名のもののなかには、「社会主義と自由」というつづきもの論争もあり、劇評さえもあって、ワルラス初期の思想や興味範囲を知るのにだいじなもののようだ。しずかで篤学の経済学者故手塚寿郎君（小樽高商）は、フランス

留学中、パリの図書館でこの『労働』から書きぬきノートをつくってきたように聞いていたが、以上のような諸資料をつかってくれる学者は、五〇年ちかくたっても出てこなかったので、ぼくは、いま、これらの貴重な資料の返還について考えているところである。」(「わが道経済学」)

ワルラス文献と並行して大塚はパレートの著作も熱心に集めた。たとえば、パレートの主著『経済学提要』(1906) の数学付録を改訂したフランス版『Manuel d'économie politipue』(1909) にはタイトルページの見返しに、

この本を買ったときはうれしかった

Lausanne にて　Aug. 7. 1922　Kinnoske Otsuka

とあり、691ページの大作を多くの赤線を引いて最後まで精読し、万年筆と鉛筆でマージナル・ノートも多数つけている。

「大塚文庫」のパレート文献はワルラス文献より多く52件を数える。大塚はパレート教授と文通して、その著作目録を作るようになった。パレート教授は大きな小包を送ってくれて、そのなかには当時、すでにヨーロッパの書籍市場にもないような貴重な文献も多数入っていた。

4

ベルリン大学で大塚はボルトキェーヴィッチ教授のゼミに参加し、次いでゾンバルト教授のゼミに参加して勉強をつづけた。当時のドイツは第1次大戦敗戦の直後で、激しいインフレーションの進行、食料不足、頻発するストライキ、ドイツ閣僚ワルター・ラーテナウが射殺されるという恐ろしい政情不安、等々のため落ちついて勉強することなどできなかった。そのなかでも大塚は基本的な数理経済学文献の収集をつづけていたが、福田の命令による数理経済学の研究から次第に社会主義経済学への転換の道を歩み始めた。それと並行してようやく社会主義文献を集めるようになった。

1923年（大正12年）の関東大震災は、東京出身の留学生には大ショックであった。大塚はその年の暮にマルセーユを発って翌1月、神戸

に着いた。4月から予科で、また7月から大学本科と専門部で講義を開始する一方、留学前に部分訳を刊行したA.マーシャルの『経済学原理』の完訳を1926年までに全4巻刊行した。この印税は国際的な社会主義文献の収集と労働者のいろいろな運動のために使われた。

5

この頃、大塚はマルクス主義文献の読書をレーニンの『帝国主義』のような小冊子から始めていた。しかし、マルクス主義の基礎的理論や歴史観を学ぶ必要を痛感して、マルクスの『資本』をドイツ語で勉強する決心をした。1929年、大塚は『資本』の読書を開始した。「ぼくは、睡眠時間を五時間にきりつめた。夜は、夕食をすませると七時に寝て夜なかの一二時に起き、当時、ぼくはまだ独身だったが、家人に気づかれぬように自分で紅茶をわかして飲んでは本を読んだ。そして、くわしい細字の書きぬきノート八冊、五七〇枚を一九三〇（昭和五）年一月七日におわった。文字どおり、暮れも正月もなかった。ぼくの三七歳のときだった。」(「わが道　経済学」)。

大塚の使用した『資本』は第1巻と第2巻はカウツキーの民衆版、第3巻は旧エンゲルス版の新刷である。「大塚文庫」のなかに残されているこの『資本』を点検してみると、全ページに朱筆の赤線が引かれ、マージナル・ノートは各ページに驚くべきことに万年筆でびっしり書かれているのである。

次いで1930年7月28日から『剰余価値学説史』の読書にとりかかった。テキストはK.カウツキー編集のディーツ版（1923年）である。「大塚文庫」にある同書を点検してみると、全ページに朱筆で赤線が引かれ、マージナル・ノートが書かれていることは『資本』と全く同じであるが、表紙の前の遊び紙に読書日記と読書の心構えを書いた白い紙が貼りつけてある。読書日記は、1930年7月28日から始まり、9月20日までの毎日の読み終わったページ数が記され、月毎の集計もある。最後に「正味37日。しかし一ケ月$\frac{2}{3}$だ。」と書いてある。読書の心構えは1930年8月16日の日付があり、以下6条にわけて書かれている。

ほんの素読だ。詳しく律気に細かく読め。計算こそ大事なのだから一々自分でやって見ろ。引用書全部当って見ろ。引用句は、苦心の抜書なのだから、しっかり分析しろ。日限などきって読んではだめだぞ。

以上の読書の心構えは、大塚の気迫がまざまざと伝わってくる貴重な記録であろう。このようにして大塚は読了後、5冊、320枚の書きぬきノートを1931年1月6日につくり終わった。今度は、とくに『資本』全3巻の理解を助ける個所や、経済学史の勉強に役立つ個所をもらさないように書きぬいた。

「大塚文庫」のなかのマルクスの著作は、74件を数え、MEGA を含むドイツ語の全集。イタリー語、英語、ロシ語などの全集、『資本』のその後の刊本、仏・伊・英訳版。『共産党宣言』の各国版がある。またレーニンは、『帝国主義』の各版、『レーニン全集』の各国語版などの文献が多数含まれている。これらの文献のなかにも書き込み本が見られる。さらに、いうまでもないが、ローザンヌ学派とマルクス経済学派以外の経済学の学派（イギリス古典経済学、ケンブリッジ学派、ドイツ歴史学派、オーストリア学派、等々）の代表的学者の著作にも多くの書き込み本が見られる筈である。これらの調査の結果の報告は次の機会に待ちたい。

6

以上で「大塚文庫」の洋書の調査の第1回中間報告を終わる。ところで一橋大学所蔵の大塚先生のコレクションには、『大塚金之助著作集』を編集する際、吉祥寺の自宅と箱根仙石原の山荘から大学図書館へ移された書物以外の厖大な資料があり、現在、古典資料センターの3階に「大塚文庫」とともにダンボール箱につめて保存されている。その1部は『大塚金之助著作集第十巻』の著作目録の「二　未発表手稿」で10項目に分類して収録されている。このうちとくに重要な手稿は「IV　大学講義草稿」と大量の「IV　書きぬきノート」であろう。「大学講義草稿」については『一橋小平学報』の第89号（1984. 4）に当時の学長種瀬　茂教授が「大塚先生の講義ノート（第二次大戦

前）と題して寄稿している。また種瀬教授は『一橋大学学問史』（一橋大学学園史刊行委員会編集、1986年）のなかの「マルクス経済学」でこの講義ノートを使って大塚の戦前の経済原論の講義を紹介している。

ところでこの未発表手稿の項目のなかには当然であるが、手稿以外の大塚関係資料は省かれている。例えば「V　上申書」に関連した裁判関係の資料を、大塚は1933年11月、豊多摩刑務所を出獄後、担当弁護士を通して入手している。

また、大学復帰後の1947年から担当した「研究指導」ではゼミナリステンの指導の詳細な記録を残している。さらに大量の往復書簡が残されているが、このなかには『著作集』に収録されていないアララギ派の恩師島木赤彦にあてた手紙などが含まれている。最後にあげておきたいのは大量の新聞、雑誌の切りぬきである。これは大塚が東京商科大学に就職したときにアプレンティスシップとしてやらされたもので、それ以来断続的であるが、亡くなる寸前までつづけられたものである。

以上のように一橋大学所蔵の「大塚文庫」は、洋書の貴重書と未整理の厖大な資料をセットにして考えなければならない。そのとり扱いをどのようにするかについての結論を出すための調査は、金沢幾子さんと石井　健氏によって進められているので、３人の調査をつき合わせて今年の末までには報告書が作成される予定である。